

令和二年度 九州国際大学付属高等学校

国語 入学試験問題

問題用紙（1～16ページ） 試験時間（50分）

注意事項

1. 試験問題は、試験開始の合図があるまで開けないこと。
2. 試験開始後、問題冊子の印刷の不具合などに気付いた場合は手を挙げて監督者に申し出ること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 携帯電話、計算機、アラーム等の使用は禁止する。
5. 体調不良等の場合は、監督者に申し出ること。
6. 問題用紙は、各自持ち帰ること。

字数制限のある問いについては、句読点も一字とします。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う。鳥はいわば空の中に閉じこめられている。魚も同様で、水の中に閉じこめられている。鳥は空を「空」とは呼ばず、魚も水を「水」と名づけることはない。人間がするようには自分の住む世界を対象として捉えることがないからだ。人間は言葉を用い、空を「空」と呼び、海を「海」と名づけた。いわば世界と自分をはっきりと分けて認識している。その意味で人間は、世界に閉じこめられてはいない。言い換えれば人間は、鳥や魚と同じような意味では「自然（＝世界）」の中に生きていない。おそらくこのことが、人間、とりわけ若い皆さんが世界と自分との間に「ズレ」を感じる理由だ。

重要なことは、このズレがあるからこそ、人間はほかの動物のように自足することができず、自分が生きる世界を絶えずつくり替えていかなければならないということ。例えば、森を切り拓き、田畑をつくる。これこそ人間だけが持っている自由であり、人間が自由である証しなのだが、見方を変えれば、その自由に閉じこめられているともいえない。人間は、自分が生きている世界と自分との間に越えがたいズレを感じながら、（「コドクではあるけれども」自由に、世界を学び、世界を自分に合うようにつくり替える努力を積み重ねてきた。それが歴史ということ。私たちは今、その結果としての世界を生きているのだ。

I 現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で複雑だ。例えば、地下鉄を通したり、ジェット機を飛ばしたりしているが、そのために何が必要かを挙げてみればわかる。まず、言葉を知らなければならぬ。世界の仕組みを理解して記述するには、数学がなければならぬ。物理学も工学も欠かせない。いくつものことを積み重ねて、ようやくジェット機が一機、空を飛べる。

そうした数学や物理学、工学は、自然そのものではなく、人間が自然を学びながらつくり出したタイ「⑥ケイ」であるから、学ぶことには「④二段階あることになる。星の運行から「⑤暦」をつくり、めぐる季節の知識を生かした耕作や狩猟を行うなど、自然を学ぶことが「①第一段階だとすれば、自然を学んだ人間がつくり出したものを学ぶことが「②第二段階だ。現代を生きる我々には、この「③二重の学び」が宿命づけられており、この第二段階のために特に必要とされているのが「④」ということになる。

人間がつくり出したものは数えきれず、一人では到底学びきれない。人間は学ぶべきことを増やしすぎたのではないかと思うほどだ。研究分野の細分化も近年ますます進行している。例えば、脳の「⑦海馬」という部分を研究している脳科学者の知人がいる。人間は何かを学ぶたびに海馬の最深部で「⑧新生ニューロン」という神経組織を「⑨セイセイ」している。知人はこのメカニズムを研究しているのだが、同じ研究に取り組む研究チームは世界におよそ一〇〇チームもあり、日々

成果を競っているという。

Ⅱ、何をするにせよ勉強して覚えるべきことは多い。新生ニューロンに限らず、何か新発見をするほどの研究者になりたいのであればなおさらだ。しかし知識量で勝る者が強者かという、現実はそのようになっていない。実は新発見というものは、発見者が一五〜一六歳の頃からその種を自分の中に宿すむしていることが多い。Ⅲ、あなたたちの年になにかの「種」が宿されるということ。これは分野によらない。このことが、タンテキ④に示しているのは、世界を変える力は知識ではなく「若い力」だということだ。若い力とは「知らない」力であり、⑤「知っている」ということよりも「知らない」ということのほうが重要なのである。

理由の一つが「エラー」、つまり「失敗」する可能性だ。膨大な知識のタイケイに分け入った若者は、それを骨肉化しようとするとき、誤った理解をすることもしばしばある。物事は、教えられたとおりに学ぶとは限らないからだ。新発見は、それまでの常識からすればエラー、あるいはアクシデントと呼ばれるジ⑥タイの中でなされることが多い。人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある。生物としての人類もそうやって進化してきたはず。突然変異というエラーを利用することで環境に適応し、生き残ってきたのだから。歳をとると失敗を恥じるようになり、エラーを起こせなくなっていくが、エラーを恐れてはならない。若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ。

物理学者のある友人は、高校で教わった「虚数単位⑦」が大人になってもずっと頭にひっかかっていたという。虚数単位は1の平方根だと説明されても「よくわからない。気持ち悪い。なんかおかしい」という思いを、彼は長い間、頭の片隅に置いておいた。三〇年後、彼はその虚数を利用してまったく新しいタイプの電子顕微鏡⑧を発明するのだが、皆さんの年頃に抱いたほんの少しの違和感と疑問を持ち続け、それが花開いたのだという。

「知らない」ことは大きな力にもなりうる。エラーをする可能性はおおいにあるが、それは、誰も考えつかなかったことを行う可能性でもある。学校では「間違えてはならない」という雰囲気形成されがちだが、それは世界を変える力を逆に失わせてしまうことになるかもしれない。

(小林 康夫『何のために「学ぶ」のか〈中学生からの大学講義〉から)

問一 二重傍線部①～⑤に相当する漢字を含むものを、次の各群のア～エのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① コドク

ア コジンの見解として述べる
イ 意志を貫いてコグン奮闘する
ウ ボールがコを描きながら飛ぶ
エ 無実を示すシヨウコは少ない

② タイケイ

ア 毎日確実にカケイ簿をつける
イ 努力してゲンケイを保たせる
ウ 出題ケイコウの分析が必要だ
エ リケイの進路を目指して学ぶ

③ セイセイ

ア 新商品のセイゾウ元を尋ねる
イ 人びとのヨウセイにこたえる
ウ 問題がハセイして大きくなる
エ 他社とのチヨウセイが難しい

④ タンテキ

ア 事件のホツタンから説明する
イ タントウ直入に質問をされる
ウ ダイタンな行動で注意を引く
エ 季節の味わいをタンカで詠む

⑤ ジタイ

ア 高校受験のタイサクは万全だ
イ 決勝で惜しくもハイタイする
ウ 感謝の念をタイドであらわす
エ 彼女の名はタイを表している

問二 空欄

I

III

を選び、記号で答えなさい。 に入るものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ

ア つまり イ しかし ウ そのうえ エ また オ たしかに

問三 空欄 X に入る最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 歴史 イ 研究 ウ 学校 エ 教養

問四 傍線部①「鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 鳥は「空」から見下ろした一面的な風景しか認識できないから。
イ 鳥は地上や水中で継続的に活動していくことが困難であるから。
ウ 鳥は活動する世界と自分をはっきりと分けて認識しているから。
エ 鳥は自分を囲む「空」を対象として捉えることができないから。

問五 傍線部②「ズレ」を言い換えている部分を、本文から五字程度で抜き出して答えなさい。

問六 傍線部③「世界を学び、世界を自分に合うようにつくり替える」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は自然と自らの存在を分離したものであると認識しており、その意味では、自然の一部としては存在していないから。
イ 人間は自然を支配しようとしており、自分たちにとって常に快適な環境の実現を目指して、歴史を築きあげてきたから。
ウ 人間は言葉を手に入れ、様々な思考を行うことが可能となり、他の生物には解決できない自然界の問題が解決できるから。
エ 人間は自らつくりあげた知識を活用することで、周囲の自然環境に自らの寿命や生き方が影響されることはないから。

問七 傍線部④「自然を学ぶことが第一段階」とありますが、この場合、「第一段階」の例として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 土壌の改良によって作物の生産量を上げていくこと。
- イ 魚の収獲が多く見込める川を探して移住すること。
- ウ 鳥の翼を観察して飛行機の設計図を作り上げること。
- エ 鳥や魚に名前をつけて生き物として分類すること。

問八 傍線部⑤『知っている』ということよりも『知らない』ということのほうが重要」とありますが、なぜですか。その理由を「知らない」、「可能性」という言葉を必ず使って、五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問九 次に示すのは、四人の生徒が本文を読んだ後に話し合っている場面です。本文の内容をふまえて、趣旨に最も近い発言を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A —— 筆者は、人間は森を切り拓き、田畑をつくることによって世界をつくり替え、他の生物よりも自由な存在になったと指摘しているね。人間と他の生物を分けるのはやはり知識ということになるのかな。

イ 生徒B —— たしかに。そのうえで人間は学問を発達させることによって、世界中のどのような場所でも学ぶことができるようになったと思うの。私たちが外国語を勉強するのもそのために必要なことだと思うわ。

ウ 生徒C —— わかるな。人間は研究分野を細分化することによって、これまでにはなかった新たな発見をする確率が高くなったね。これからは今まで以上に、多くのことを学ばなければならぬということだね。

エ 生徒D —— それでも筆者は、人間が勉強して覚えることは多いけれど、世界を変えていく原動力は知識ではなく「若い力」だと言っているわ。私たちもこれからの世界をつくり替えていくために頑張らないうね。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

サラリーマンだった亨^{とある}は、亡き父^{注1}から奥秩父^{おくしちちや}にある山小屋の「梓小屋^{あずな}」を引き継ぐ。山小屋のスタッフには、父の代から山小屋を手伝うゴロさん、生きる気力を失い山に来て亨たちに命を救われ、そのまま山小屋で働き始めた元OLの美由紀がいた。先日、山小屋近くの沢で遭難者の遺体が発見される事件があったなか、予約客の老人が予定を過ぎても山小屋に到着せず、三人は遭難を心配し始める。

この日の予約客は三十名強。さらに予約なしの客も見込めるはずで、シーズンオフとしては盛況の部類だ。ゴロさんはこの日もボツカ^{注2}当番で、^①午後は忙しくなりそうだからと、客を送り出して間もなく麓^{ふもと}に向かった。

亨と美由紀も朝食を終えるとすぐに夕食の下ごしらえを始めた。普通なら午後からでも間に合うのだが、この日はなぜか気が急^せいた。仕事にとりかかったのはどちらからともなくだが、胸中はたぶん似たようなものだろう。

美由紀が心配していた八十四歳の老人がこの日の予約者に含まれる。無事に到着してくれればいいが、万一のことがあれば救助に向向くことになる。そのために午後はなるべく時間を空けておきたい。ゴロさんが早出したのもそんな思いがあるからだ。

梓小屋の定番料理の一つ、ジャンボ春巻を慣れた手つきで包みながら美由紀が言う。

「心配だよね。あんなことがあったから」

「例の白骨死体のこと？」

美由紀はこくりと頷^{うなず}いた。

「縁起でもないかもしれないけど、人が死ぬって、本人にとってはともかく、周りの人にとっては悲しいことだから」

「本人にとってはともかくか」

「うん。だって本人はいなくなっちゃうんだから、悲しみもなんにも感じないわけじゃない。わたしだってあのまま死んでたら、^Xそれはそれで幸せだったかもしれないよ」

美由紀は屈託^Iない口調でぎくりとすることを言う。^②亨はできれば避けたかった問いを口にした。

「いまでも、そんなふうに感じるの」

「夜、寝るときね、このまま目が覚めないで死んじゃったらいと思うことがある」

「いつも元気にしてるから、もうそんな気持ちにはならないのかと思ってたよ」

「うん。身勝手だよね。亨さんやゴロさんに命を救われて、今もこんなに大事にされているのに。」

でも、あのときといまとはずいぶん違うのよ——」

美由紀はきっぱりした口調で言った。

「生きてるのって、自分のためだけじゃないんだって気がついたわけ」

「自分のためだけじゃない？」

「うん。死にたいなんて思うのは、けっきょく自分のことしか考えていないからなのよ。でもあのとき、亨さんもゴロさんも居合わせたお客さんたちも、みんなが私を生きさせようと手を尽くしてくれた。そのときは感謝もしたけど、余計なお節介だとも感じたの。どうして辛い世界へまたわたしを引き戻すのって。どうして 幸福な眠りを私から奪うのって」

美由紀は春巻を巻く手を休めて窓の外に視線を向けた。ルビーのような真つ赤な実をつけたナナカマドの枝が風に揺れ、葉群れを抜けて注ぐ木漏れ日が厨房のあちこちに光りの斑点を揺らめかせる。

「でもここで働くようになって、だんだんわかってきたの。わたしはずっと勘違いして生きてきたのよ。自分の人生は自分のためにあるんだって——。そんなふうに人生を独り占めしようとするので、わたしはひたすら自分を追い詰めてきたんじゃないかって、いまは思うの」

④ 美由紀の言葉に亨は当惑を隠せない。

「普通に働いてもらっているだけで、おれのほうは特別なことはなにもしていないけど」

生真面目な表情で美由紀は続けた。

「気がついたのよ。気持ち沈んでるとき、誰かのためににかをしてあげると、心のなかに光が射し込むの。それは人助けだとかボランティアだとかいう大げさなことじゃないの。普段の仕事として、亨さんやゴロさんやお客さんたちと接しているだけで、気持ちが明るくなることに気づいたの。それは私にとって、生きるために必要な空気のようなものなの」

⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㊿
そこは亨も 腑に落ちた。ひたすら自己実現を求めて半導体という無機物との格闘にエネルギーを注ぎ続けたサラリーマン時代。気がついたときには人生の意味を見失っていた。まるで魂が酸欠状態にでも陥ったように、心は痩せ細り、世界は色彩を失っていた。

小屋の経営を引き継いだとき、本来生きるべき場所をようやく見つけたような気がした。そこには人を優しく包み込む大らかな自然があった。訪れる登山客たちとの心の触れ合いがあった。つまり美由紀がいう生きるために必要な空気があった。亨は頷いた。

「わかる気がする。自分というトンネルをいくら奥へ奥へと掘り続けても、出口は決して見つからない。空気もない光もない世界から抜け出すには外へ向かうしかないんだよ。人のいる場所へ、心と心が触れ合う場所へ」

美由紀は声を弾ませた。

「わたしが言いたいのはそういうことなのよ。いまでもときどきトンネルの奥へ進みたくなるけ

ど、ここにいと、いつでもそこから引きずり出してもらえるの。亨さんやゴロさんがいて、訪れてくるお客さんがいて、それがわたしにとって欠かせない空気だし、栄養だということがわかってきたの」

「人というのはそうやってお互いを支え合っているのかもしれないな。おれだって、きっといろんなかたちで、美由紀やゴロさんやお客さんから生きる力をもらってるんだよ」

「その大下さんというお爺ちゃんのこともそうなのよ。以前のわたしだったら気にもしなかったと思うの。なにかあったって自己責任だし、わたしの人生とは関係ないんだし。でもいまは違う。電話でちよっと話しただけなのに、なんだか会ってみたくなくなっちゃったの。だからもしなにかあったらすぐに動けるようにと思って、いつもより早めに仕事にとりかかったのよ」

亨もどこかうれしい気分で応じた。

「おれもそうだよ。美由紀からその人の話を聞いて、^{III} 厄介だなど思う反面、がんばって欲しいとどこかで感じてね。そういう元気な人が来てくれれば、山だって嬉しいんじゃないのかな」

「亨さん言ってたね。人間も、動物も、植物もここではみんな友達だって。生命という宝物を共有する仲間なんだって」

⑥ 「親父の口癖の受け売りだよ」

「でも、ここで暮らしていると、その言葉の意味がよくわかるの」

「だったら、おれも嬉しいよ。じつはずっと心配してたんだ。美由紀が本当に元気になってくれたのかどうか」

「わたしもわかってたよ。亨さんやゴロさんがずっと気遣ってくれてたこと。いまもときどき落ち込むけど、そんなことを感じるたびに救われるの。生きるって難しいことだから、抱え込んでるもの全部から解放されることなんて、これからもありえないかもしれない。でも少しずつだけでも、いろいろなことに堪えながら生きる勇気が育ってる気がするの」

⑦ 美由紀は傍らで揺れる木漏れ日のような柔らかい笑みを浮かべた。

(笹本 稜平 『春を背負って』 から)

(注) 1 奥秩父 —— 埼玉、群馬、山梨、長野にまたがる自然豊かな山地。

2 ポッカ当番 —— 食料品などの荷物を背負って麓から山小屋に持ってくる当番。

問一 傍線部Ⅰ～Ⅲの本文中における意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 屈託ない

- ア 楽しげで浮かれている様子
- イ とても落ち着いている様子
- ウ 感情の変化が全くない様子
- エ 何のこだわりもない様子

Ⅱ 腑に落ちた

- ア 相手の心の内を想像すること
- イ 十分に理解し、合点がいくこと
- ウ 違和感を感じ、気にすること
- エ 強い関心を持ち共感すること

Ⅲ 厄介

- ア 扱いに手数がかかり、わずらわしいこと
- イ 不幸な出来事が予想外にも起こること
- ウ 避けようと努力しても避けられないこと
- エ 解決方法が全くなく、苦しみ悩むこと

問二 傍線部①「午後は忙しくなりそうだからと、客を送り出して間もなく麓に向かった」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 予定を過ぎても予約客の老人が小屋に姿を現さないので、美由紀に相談してこちらから老人に非常食を届けようと考えたから。

イ シーズンオフにしては予約客の数が多いので、ボツカ当番で運ばなければならない荷物もいつもより多いだろうと考えたから。

ウ 多くの宿泊客を抱えているなかで先に出来る仕事はなるべく片付けておき、突発的な状況に対応できるように配慮をしたから。

エ 山に登るには多くの危険が伴うので、想定外の状況に対処できるように時間さえあれば準備することが習慣になっているから。

問三 二重傍線部X「それはそれで幸せだったかもしれないよ」、Y「幸福な眠り」とありますが、なぜ「幸せ」「幸福」と言えるのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分を心配し救い出そうとしてくれた人たちに、危険をかえりみず人命救助に努力はしたという事実を感じ取ってもらうことができるから。

イ 自分の周囲にいる人の目を全く気にすることがなく、自分のやりたいように過ごすことが出来る理想の世界が必ず待っているはずだから。

ウ 他者にとっては自分の死が悲しいことだとしても、自分にとっては目の前の辛いことからなにもかも解放され楽になることができるから。

エ 自分の死を悲しむ人たちが、自分を苦しめた原因を究明するようになることで、自分の苦しみを本当に理解してもらおうことになるから。

問四 傍線部②「亨はできれば避けたかった問いを口にした」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 美由紀に質問をすることは、結果的に美由紀を辛い状況に追い詰めていくことになると思っただから。

イ 美由紀が周囲の手助けを受けて生きるようになったものの、本当に元気になったのかと気にしていたから。

ウ 普段の様子から、美由紀が生きる意思を持っていないのではないかと感じていたことが当たっていたから。

エ 死を連想させる話は、美由紀に再び死を決意させることになるのではないかと常に考えていたから。

問五 傍線部③「わたしはずっと勘違いして生きてきたのよ」とありますが、どのように「勘違い」していたのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 本当は、山小屋の生活は常に危険で生命の危機と隣り合わせであるのに、登山客が相手の楽しい仕事であり、自分は死ぬような目に遭^あうはずがないと勘違いしていた。

イ 本当は、自分は山小屋の仲間たちに心から大事にされているのに、ポツカ当番や食事の用意など人手が必要な時の働き手としか思われていないのだと勘違いしていた。

ウ 本当は、山小屋の生活は死ぬほど退屈で苦勞が絶えない生活なのに、山の上の生活には美しい景色や人々が憧^{あこが}れるようなロマンがあり素敵な生活だと勘違いしていた。

エ 本当は、自分は多くの繋^{つな}がりの中で守られ生かされているのに、自分が関わるすべてのことは自分のために存在し、自分が良ければそれで良いのだと勘違いしていた。

問六 傍線部④「美由紀の言葉に亨は当惑を隠せない」とありますが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 生に対して真剣に語る美由紀の変化に驚くとともに、自分の山小屋で働いてもらっているだけで美由紀に影響を与えていることが意外だったから。

イ 豊かな自然に触れることで美由紀が前向きになったことに満足したが、自然が美由紀の心の傷を癒して生きる決意を固めさせたことに驚いたから。

ウ 美由紀が語っていることが亨には全く理解できないことに加えて、亨の様子を気に留めずに一方的に話している美由紀の振る舞いに困惑したから。

エ 何とか美由紀を立ち直らせようと気を配ってきたことを、美由紀がきちんと理解していたと知って、急に恥ずかしい気持ちが入り込んできたから。

問七 傍線部⑤「生きるために必要な空気のようなもの」とありますが、それはどのようなのですか。本文から六字で抜き出して答えなさい。

問八 傍線部⑥「親父の口癖の受け売りだよ」とありますが、このときの亨の気持ちを説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 美由紀に言った言葉が自分で作り出した言葉ではなかったことを気恥ずかしく思いながらも、自分の言った言葉が美由紀の考えに影響を与えたことを嬉しく思っている。

イ 人が支えあって生きていることを美由紀が実感をして、見ず知らずの他人を気遣ったり、自分や自分の父親の思いを受け取ったりしてしてくれたことを嬉しく思っている。

ウ 山で過ごすうちに多くの友達が出来たという美由紀の言葉で、父親がいつも口にしてた言葉を思い出すとともに、父親と過ごした思い出がよみがえり嬉しく思っている。

エ 美由紀が亡くなった父親の何気ない言葉を覚えていてくれたことに驚くと同時に、自分と父親と一緒に過ごした思い出を大切にしてくれていることを嬉しく思っている。

問九 傍線部⑦「美由紀は傍らで揺れる木漏れ日のような柔らかい笑みを浮かべた」とありますが、このときの美由紀の気持ちを説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア これまでの自分の生き方を恥ずかしく思う一方で精神的に成長した現在の自分を誇らしく思い、人生で起こるすべてのことをあるがままに受け入れようと決意している。
- イ 心を開くことができなかつた山小屋の仲間に対して、普段から考えていたことをすべて言うことができ満足するとともに、仲間の考えに対して深い共感を示している。
- ウ 自分のことを氣遣ってくれる人たちに囲まれて生活している中で、生きることの意味を見出し、前向きな気持ちでいられる現在の状況に対して満ち足りた気持ちでいる。
- エ 自分のことを親身になって心配してくれている周囲の人に感謝をする一方で、皆それぞれ違う悩みを抱えて生きていることを知って、深い慈しみの気持ちを持っている。

問十 この文章における表現の特徴について説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 生きていくことが困難な状況のなかでも、予想さえしない出来事に勇敢に立ち向かう姿や、お互いに励ましあいながら連帯感を強めていく様子が浮き彫りにされている。
- イ 奥秩父の雄大な自然に親しんで生活していくうちに、美由紀が心身ともに健康になっていく様子や周囲の人たちを再び信頼していく様子が、細やかに描き出されている。
- ウ 色鮮やかな奥秩父の自然を描写することで、亨や美由紀の辛い過去と対比させるとともに、山は都会で傷ついた心を癒すのに極めて理想的な場所であることを表している。
- エ 人を包み込むような豊かな環境を舞台として、様々な経験や思いを持っている登場人物達が生に対する会話を交わすなかで、互いに共感していく様子を描き出している。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今はむかし、浮世房(注1)、篠田(注2)の方かたへ行きたり。いにしへ篠田(注3)の杜もりには名譽なごの狐ありて、往來ゆききの人を化かすといへり。篠田村のなにがしとかやいふ者、住吉(注4)に詣まうでて帰るとて、道のほとりにて美しき女に行き合ひたり。とかくかたらひて夫婦となり、家に帰りて年を経へたるに、一人の子を生みけり。その子五歳の時、母にいだかれてありしに、A の見えければ、これを恥はづかしがりて、かの母もとの狐の姿になりつつ、篠田の杜に立ちかくれたり。夫をととはこの年頃あひ馴(注5)れて、① それとは知りながらさすがに名残なごりの惜しく思はれつつ、かくぞ詠よみける。

子を思ふ闇やみの夜ごとにとへかした昼は篠田の杜に住むとも

と詠じてうち泣きけるを、妻の狐は立ち聞きて、② かぎりなく悲し、と思ひつつ、窓をへだててかくぞいひける。

(注6) 契ちぎりせし情なさけの色の忘れられで我はしのどの杜に啼なくなり

と詠じけり。かくて、夫田をとしをつくれれば、かの狐来たりて夜の間にさなへを植うゑ、水をせき入れ、草をとりけるほどに、年ごとに満(注7)作まなりしかば、家大おほいに富みさかえけるとなり。浮世房この事を思ひ出だし、③ あはれをもよほしけるが、篠田の村の方へ行くと思へども、在所(注8)は手にとるやうに見えながら行き着かず。夜よひと夜歩よきて、やうやう明方あけかたになり、それよりすこし、III 心づきて、「これは(注9)いかさま狐の化かして、かやうに連れ歩あるか」と思ひ、「日ごろ聞きたることあり」と、顔(注10)を懐かこにさし入れて袖口そでぐちよりのぞきて見れば、背中せちゆうのはげたる古狐ふるきつね、うしろ足にて立ちて先に行く。④ 「さればこそ」と思ひ、声をあげて、「生首(注11)切られの古狐め」とて追ひかけたれば、田畦たあぜともいはず、狐は逃げてうせぬ。浮世房は、夢のさめたる心地して、「ここはいづくぞ」と人に問へば、「天王寺の前なり」といふ。「口惜しくも化かされけるかな」と思へども甲斐かひなし。

(浅井 了意『浮世物語』から)

- (注)
- | | | |
|----|-------------|--|
| 1 | 浮世房 | 諸国を遍歴する修行僧の名。「房」は「坊」と同じ。 |
| 2 | 篠田 | 現在の大阪府和泉市。下にある「篠田の杜」は同市の信 <small>しのだやま</small> 太山にあつた森のこと。 |
| 3 | 名誉の | 怪しく不思議な。 |
| 4 | 住吉 | 大阪市住吉区にある住吉大社のこと。 |
| 5 | この年頃 | ここ数年来。 |
| 6 | 契りせし情の色の | あなたと結ばれたあのやさしい愛が。 |
| 7 | 満作 | 豊作。 |
| 8 | 在所 | 目的地の篠田村のこと。 |
| 9 | いかさま | どうみても。きつと。 |
| 10 | 顔を懐にさし入れて | 俗説で化けた狐の正体を見破る方法とされる。 |
| 11 | 「生首切られの古狐め」 | 相手を激しくののしる言葉。 |
| 12 | 田畦ともいはず | 田も畦（水田と水田との間に土を盛り上げた所）も區別せず、いちもくさんに。 |

問一 二重傍線部「さなへを植ゑ」を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部Ⅰ～Ⅲの口語訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ とかくかたらひて

- | | |
|---|-----------------|
| ア | 十分に納得ゆくまで相談を重ねて |
| イ | あれこれと親しく言葉を交わして |
| ウ | 一切の事情をこと細かに説明して |
| エ | ともかくも急ぎ本心を打ち明けて |

Ⅱ 夜ひと夜歩き、
やうやう明方あけがたになり

- | | |
|---|------------------------|
| ア | 一晩じゆう歩き続けて、やがて夜明けになったが |
| イ | 夜な夜な歩き回って、決まって明るい光がさすと |
| ウ | 夜更けに歩き始めて、ようやく夜が明けるころに |
| エ | 一晩だけ遊び歩いて、しだいに明るくなったので |

Ⅲ 心づきて

- | | |
|---|-------|
| ア | 落ち着いて |
| イ | 残念がって |
| ウ | 変に思つて |
| エ | 意気込んで |

問三 文中の A には、漢字一字が入ります。次のア～エの四字熟語のうち、同じ漢字が入るものを記号で選び、空欄にあてはまる漢字を答えなさい。

ア 瞭然 イ 竜頭蛇 ウ 危機 エ 異 同音

問四 傍線部①「それとは知りながら」の「それ」の指す内容を、解答欄に合うように十字以内で答えなさい。

問五 傍線部②「かぎりなく悲し」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもの行く末を心配する夫が、時々は闇にまぎれて賢い母のもとに息子を通わせるので、どうか立派な青年に育てて欲しいと一途に頼んできた誠実な言葉に妻はすっかり感心したから。

イ 二人で事前に相談のうえ、逢うのは月が沈んだ直後のわずかな時間だけだと決めておいたのに、夫は何度も逢いたいとせがみ、その未練がましい姿を妻はつくづく鬱陶しいと感じたから。

ウ 夫に満月の出ない日は逢いに行つてよいかと問われたが、母と子の平穏な暮らしを台無しにした夫の来訪を快く受け入れることなどできず、妻は反省の色のない夫にひどく失望したから。

エ 妻を別世界の住人と知っても、夫はかけがえのない存在として慕い続け、せめて真っ暗な夜だけでもそっと我々に逢いに来たいと、心から願う変わらぬ深い情愛に胸を打たれたから。

問六 傍線部③「あはれをもよほしける」とありますが、このときの心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親切な人間と優しい狐の純愛物語を村人から聞かされ、優雅な話の展開に深く感動している。

イ 由緒ある伝説の森がすっかり失われたのを目にし、この世のはかなさをつくづく思っている。

ウ この土地にゆかりのある狐と人間の哀切な伝承を思い浮かべて、感傷的な気分になっている。

エ 人と狐の間に良好な関係が築かれていた時代を懐かしみ、現在の荒んだ人の心を嘆いている。

問七 傍線部④「さればこそ」の解釈として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア やっぱり逃げて行くらしいぞ
- イ さては化かされてしまったか
- ウ よしそれでは跡をつけてみよう
- エ そうはいうものの怖いからなあ

問八 本文には、昔からの伝説が挿入されています。その部分の最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問九 本文の内容と合致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 浮世房はまんまと古狐に化かされたものの、この地方に古くから伝わる狐と人間の悲しい恋の物語に心を動かされて狐に好意を抱いていたため、不思議と悔しさは込み上げてこなかった。

イ 子どもは両親の愛を一身に受けて順調に成長したが、五歳になったとき、母親が狐であることに気づき、自分にも同じ血が流れていることを恥ずかしく思い、泣きながら家を出て行った。

ウ 夫は人里に現れては悪さを働く狐を優しく労^{いたわ}ってやったことから恩返しを受け、しだいに蓄^{たくわ}えも増えて、そのうえ最愛の妻との間には男児を授かつて家は大いに富み栄えることとなった。

エ 母狐は将来にわたって父子が生活に困ることがないようにと気遣い、夜ふけにこっそりやってきては農作業をすすめていたが、その結果、父子の田んぼには毎年みごとな稲穂が実った。